九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

抄物資料を活用した日本語文法史研究

古田，龍啓

https://hdl.handle.net/2324/7182260

出版情報：Kyushu University, 2023, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

（様式３）

氏　　名　：古田　龍啓

論 文 名　：抄物資料を活用した日本語文法史研究

区　　分　：甲

論　文　内　容　の　要　旨

本論文で扱う抄物（しょうもの）資料とは、室町時代から江戸時代の初期にかけ、京都五山の禅僧や博士家の学者らによって作製された漢籍や仏典、国書を対象とした注釈書を指す。抄物資料は、主に「講義の聞書」として成立しており、当時の口語を反映する文献として重要視されてきた。

抄物資料が反映する中世後期・近世初期のことばは、古代語から近現代語へと、その文法体系が大きく変化する転換点に位置する。抄物資料を活用した言語研究は、明治末期から 1 世紀以上、精力的に進められてきた。しかし、抄物資料を基に、現代語の記述的・理論的研究の成果を参照したり、『日本語歴史コーパス』を活用したりして、前後の時代を視野に入れ、通史的な文法変化を描き出す研究は十分になされておらず、発展の余地が残されている。

また、現存する抄物の全体像は明らかになりつつあるが、素姓が詳らかでない資料も数多く残る。抄物は、先行抄の注釈文を取り込んで作製されることが多く、言語資料として活用するためには、資料間の影響関係の解明が欠かせない。新資料の発掘も行われなければならない。

そこで、本論文は、上記の問題意識の下、「抄物を巡る資料的考察」と「抄物資料を活用した文法史研究」の 2 部構成で、文献学的な手法に基づき、個々の抄物の資料的性格の解明に取り組むとともに、抄物資料を主たる考察対象に据え、通史的な文法変化の一端を明らかにした。

第 I 部では、室町時代に初学書として広く読まれ、それぞれ経部と集部で最も多くの種類が残る『論語』と『三体詩』の抄物を取り上げた。

第 1 章では、博士家・清原家における最古の論語の抄物である清原良賢（1348~1432）講『論語抄』について考察し、諸本の系統や資料性を明らかにした。『良賢抄』の写本が、東山本・大東急本、両足院本・米沢本の 2 系統に分けられること、口語資料としては前者が有用であるが、アクセスしやすい東山本には多くの脱落・誤写があり、利用の際は他本との校合が欠かせないことを指摘した。

第 2 章から第 4 章では、『三体詩』の抄物について論じた。第 2 章では、先行研究で看過されてきた駒沢大学図書館蔵『三体唐詩絶句鈔』が、抄物の中心的な作製者であり、口語性の高い抄物を残した五山僧・桃源瑞仙（1430～1489）の『三体詩』の抄物（以下、『桃源抄』）である

ことを解明し、文明（1469～1487）期の言語を反映する資料として有益なことを指摘した。

第 3 章では、前章の成果を活用し、学会未紹介の国立国語研究所蔵『絶句抄』が、『桃源抄』を取り込み成立した妙心寺系統の三体詩抄であることを述べた。

第 4 章では、東京芸術大学附属図書館脇本文庫に収蔵される『三体詩』の抄物が、五山僧・希世霊彦（1403~1488）の抄（以下、『希世抄』）であることを突き止め、『希世抄』の諸本間の関係や言語的特徴を明らかにした。書写年（1515 年）が特定された脇本文庫本を再発見したことで、『希世抄』の言語資料としての価値を高めた。

第Ⅰ部では、単なる資料性の解明に留まらず、言語資料としての活用を念頭に置き、各章でその実践例を併せて示した。

第Ⅱ部では、抄物資料を中心に、助詞や副詞の歴史的変化を描いた。抄物資料には、五山僧らの手による関西系の資料に加え、関東を中心に曹洞宗の僧が作製した「洞門（とうもん）抄物」と呼ばれる資料がある。洞門抄物は、東国方言を反映する資料として活用が期待されているが、内容の難解さのために、取り上げられる機会は関西系の抄物以上に少なく、研究が停滞している。そこで、16 世紀末から 17 世紀に隆盛を迎える洞門抄物を中心に広範な抄物資料を活用し、質・量ともに十分なデータを集め、文法変化の解明に取り組んだ。

第 1 章では、助詞マデが中世後期に獲得した限定用法の特徴を明らかにし、成立過程を考察した。主に述語として用いられ、序列に基づく排他性を示す当該用法は、マデが述部で節を受けるようになった結果、限度を表す用法から生じたこと、限定用法が文末で多用されることで、評価的意味が焼き付けられ、近世期にマデダへと連なるモダリティ形式となったことを論じた。

第 2 章では、助詞ヨリ・カラに動作主への敬意を表す「主格用法」を認めるロドリゲス『日本大文典』の記述を抄物資料によって検証し、当該用法の成立過程を明らかにした。

第 3 章では、コピュラのダ・ヂヤを用いた並列形式について論じた。抄物資料を中心に、事物を並列する際に用いられるコピュラのダ・ヂヤの使用実態を明らかにし、これらの並列形式化の経緯が、「引用句派生の例示」と呼ばれる変化のモデルと一致することを論じた。

第 4 章では、語史を論ずる先行研究が存在しない副詞タシカについて、初出例が現れる洞門抄物を中心に調べ、その史的変遷を記述した。タシカが「推測内容の不確かさ」を表す副詞としてタシカニとの対比の下、中世末期に成立したこと、命題の真偽に関する不確かさという共通点を仲立ちに、「想起内容の不確かさ」も表すようになったが、他の副詞との競合関係から、次第に推測内容の不確かさを表す用法を失い、想起内容の不確かさを表す専用形式化したことを明らかにした。

第 5 章では、洞門抄物を中心に成立当初の用例が現れる抄物資料を活用し、原因や理由がわかり、納得するさまを表す副詞「道理デ」の成立過程を明らかにした。17 世紀前半に、先行文と後続文の因果関係を説明する副詞として使われ始めたこと、当初は、所与の事態から生じる結果を説明することも、発話時における新たな認識を表すこともできたが、18 世紀に入り、後者の用法へと傾き、納得感を表す用法に特化したことを述べた。